
D O D憑依転生異世界巡り。

鳴る神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOD憑依転生異世界巡り。

【Nコード】

N9776I

【作者名】

鳴る神

【あらすじ】

隕石を頭に食らって死んだ主人公！

死んだ先で神様の暇潰しにつかわれDODの世界へ！

この小説は作者の自己満足です。
それを許容できる方だけどうぞ。

プロローグ、神様の暇潰し。 (前書き)

こんにちは、鳴る神です。

作者の自己満足の作品ですが、
読んでいただけると嬉しいです。

ブログ、神様の暇潰し。

side ?

俺は感動した。

店頭に置いてあった中古のゲーム、暇潰しに買ってみたら凄かった。

美麗なグラフィック、緻密なストーリー、単なる勧善懲悪の話でなく、誰もが腹に一物抱えている、そんな話。

素晴らしいと思った。

それに比べて俺の生活…

ベッドの上から部屋を見してみる。

汚く、物で溢れている。

オタクの部屋だ。

それを見ながらオタクなら誰もが一度は考えることを思う。
どうしてこの平凡な世界に産まれたのか、

どうしてもっとスリル溢れる世界に産まれなかったのか。

心から思い、呟く。

「ああ…生まれ変わりたい…。」

次の瞬間、

屋根を突き破り何かが高速で顔に突き刺さる。

…

…

…

『おい、起きろや〜』

ペシペシ

何かに頬を叩かれる音。

『あれ？つかしーなー？』

起きろつて!』

バシッ!バシッ!

何かに頬をぶたれる音。

意識が覚醒する。

此处は…何処だ?

『チッ!こうなったらアレで…』

誰かが遠ざかる気配。

目を開け辺りを見回す。

白い何も無い空間。

ふと、上を見える。

…っなんか降ってきた!?

慌て避ける。

ドゴッツツッ!!

爆音と共に地面が陥没する!!

「あつぶなっ!?

何っ?俺何で寝起きで死にかけんてんの俺っ!?!」

『おー起きた起きた、よっ!おはよーさん。』

「おはよーっじゃねえよ!?!ってお前誰!?!此処何処だ!?!」

マジで分けわからんのですけど!?

『もちつけ』

ドグッ!

「リッ、リバーブローすんなや…」

めっちゃいい角度ではいった…

………

……

…

『落ち着いた?』

「お陰様でな…」

目の前に立つ黒髪黒瞳の平凡そうな男。
しかし雰囲気がそれを否定する。

威圧感、とでもいえばいいのか圧倒的なオーラを身に纏っている。

「さっきの質問だが…此処は何処だ？そしてお前は誰だ？」

『ここは死と生の狭間で俺はこの宇宙の産みの親って所かな？』

は？

『地球の最高神を地球神とするなら宇宙神ってところかな？
いわば神を含めて全ての神様ってところかな。』

「なるほどね…いわば神の神って所か…」

『あり？否定しないのかい？』

「真偽はわからんが今は否定する要素が無いからな。」

『ふーん利口だね。』

まあいいやそっちのが話やすいしね。』

「そりゃどうも。」

『君がここに居るのは僕の暇潰しのためさ。』

「暇潰しね…流石神様、暇潰しで人を殺すのか…」

たまったもんじゃないな。

『まあ、君が死んだのは偶々だけだね。』

「おいっ!？」

『ハッハッハ、良いじゃないか。君の願いが叶うんだよ?』

ドグンッ!

心臓が跳ねる。

願い?まさか…

「おいっ!まさか生まれ変わるってのかっ?」

『正解だよ、正確には君に生まれ変わって異世界を旅してもらう。』

おいおいマジかよ!

「嬉しいが何で俺なんだ?」

『言ったでしょ偶々だって、

君のいた世界に石を投げ入れて当たった人にするって決めたんだ。』

!最後に見たアレかっ!?

「最後に一つ聞いても言いか?」

『なんだい?』

「俺を異世界に飛ばしてどうするんだ?」

『言っただろ、暇潰しだって、

僕は暇なんだよ、だから僕は考えた。

人間に力を与え無限にある平行世界や異世界に飛ばし、それを見て楽しむってね。』

おいおい強くてニューゲームかよ？

「つまり、お前を異世界に介入してお前を楽しませると…」

『嫌かい？イヤなら別に違う人を連れてくる「上等じゃねえかつ！」けど…イヤじゃないみたいだね。』

誰がイヤなわけがあるか！平凡からの離脱、未知への冒険！どれも俺が求めて止まなかったもんだ！！

「感謝するぜ宇宙神！

今、此処に契約を結ぼう！

俺はお前を楽しめます！

だからお前は俺に力を寄越せっ！！」

よしっ！決まったぜ

『よしっ契約完了、

さて、君に与える力だけどどんな力がいいかな？

理想としては僕以外には絶対負けない位がいいんだけど…』

つまり…全宇宙で二番目に強いってことか？

そんな力…

！、あつたぜっ！

「なら…人修羅、人修羅はどうだ？

あれならいいんじゃないか？」

アレは最強だろう…

『うーんアレか』

いいんじゃないかなっ！

『

よしっこれで勝つる！

『じゃあ人修羅のLvカンストでマガタマがマサカドウスでどうかな？』

！最強じゃんかよ…

「後はどんな言葉が話せ、どんな文字でも理解できるようにしてあげるよ。」

サービスいいな…

「後、俺から人を殺す罪悪感を消してくれよ。」

『中々面白い注文だね…

良いけどさ』

「ありがとよ、ところで…俺を何処に送るつもりだ？」

『君が知っている世界…とでも言うておこうかな。

ああ、因みに最初の世界は強制で2つ目の世界からは自分の意思で世界を飛べる力をあげよう。』

「何で最初だけ強制なんだ？」

『ああ、実はその世界の神がバカやってねえー
ム力ついたから君に潰して貰おうと思ってね。』

あつさり言つな…

『因みにその世界には転生してもらつからね。
じゃないと力を与えられないから。』

ちょまつ！

意識が…遠く……

『僕は今からノータッチだからね。
楽しみにしてるよ』

………

……

…

バシッ！バシッ！

ちよっ！痛っ！なにこれ？

「うえっ！うえあっ！あうよ！あうあうよ！（ちよっ！痛いって！泣くよ！？俺泣くよ！？）」

「おお！お生まれになりましたぞっ！元気な男の子ですぞ！」

叩いたのデメエかつ！？

顔覚えた…って…

目が見えねえっ！？

「うむ、見よ！この目を！

既に覇氣が宿っておる！

将来立派に儂の後を継いでくれそうじゃ！」

誰だ、このダンディーな声？

「もう貴方ったら…気が早いですよ。ところで、この子の名前は何ですか？」

「名前か？名前は既に決まっておる！今日からお前の名は、カイル！カイル・カルレオンだ！！」

ええええええつつっ！！！？？

D O D か ょ っ ! ?

プロローグ、神様の暇潰し。（後書き）

この作品は人修羅チートで主人公が好き勝手に暴れまわる、というものです。

ご都合主義、房二成分、捏造設定が多分に含まれています。それでも読んでいただけるなら嬉しいです。

主人公設定。（前書き）

設定です。

主人公設定。

主人公、元オタク。

現在カイク・カールレオン。

原作開始時24歳。血液型はAB型。

蒼の瞳に短い茶髪の髪型。

端正な顔立ちだが中の人のせいでパツと見三枚目。

神から人修羅の力を貰い神を楽しませる為にDODの世界に憑依転生した。

カイクはカールレオン国第一王子で正統王位継承者。

カールレオンは小さいながらも豊かな自然に恵まれた土地で、比較的他国の領土へ感心も少なく、平和な治世を行っていた。

カールレオンの国軍は初代国王からの伝統である剣技を磨くことに専念し、専守防衛を規範としていた。

カイクの父であるガアブは8代目の国王にあたり、歴代の王の中でも剣の達人として名を馳せており。

カイクもあらゆる武器を教え込まれており。全ての武器を巧みに操ることができる。

しかし戦闘方法は神からもらった人修羅の力を使い素手で戦うことが多い。

武器を使う時も巨大な武器を片手で振り回し敵を薙ぎ払うのを得意とする。

原作と違い武器の所有制限は人修羅の能力で解決しており武器は無

制限。

人修羅とは？

とある世界で総ての神々、悪魔を打倒したマガタマを埋め込まれた元人間の半人半魔の男。

光る刺青や、首の後ろの角が特徴的。

カイムは神から人修羅の力（偽）を貰っており。人修羅の全ての技術を使用可能……だが、まだまだ上位のものは習得しておらず、せいぜいマハラギオンクラスが限界。

が、有り余る魔力で無理やり強化して使用している。

攻撃への耐性も本来なら無効化だが、耐性が有る程度に留まっている。

ちなみに、人修羅の力（偽）なので角は生えていないが、感情が昂ぶると刺青が浮き出てくる。

主人公設定。（後書き）

こんな小説ですが、
読んでいただけると嬉しいです。

第一話、マイエンジェルフリア誕生！（前書き）

作者です。

この小説はもう一本の傍ら息抜きで書いておりますので、
どうしても遅くなりますのをご了承下さい。

この作品はご都合設定、捏造設定、厨二設定などが多分に含まれて
います。

第一話、マイエンジェルフリア誕生！

side ガアプ

儂の息子は天才だ、
いや天才というのも生温い。

一歳の時には言葉を喋り、立って歩いた。
二歳で肉体の鍛練を初め、三歳で儂を負かし、四歳で魔導を極めお
った…あやつは今政治や礼儀作法の勉強をしている。
だが、それも修得するのに時間はかからんだろうな…
しかも才能にかまけて努力を怠るようなことはしないし、才能を鼻
にかけて威張るようなこともしない。

臣下や領民とも積極的に関わり合い人気もある。
正に王となるべくして産まれた男よ。

時々理解出来ん言葉を発するが…凡人に天才の考えは理解できん
ということなのだろうか？

それよりもうすぐ我が妻が新たな子を産むそうだ…
今度は男か女か…どちらでも楽しみじゃ。

s i d e o u t

s i d e K a i m u

フリアエが産まれたよっつ！
可愛い、可愛いよフリアエ！
今三歳なんだけどメチャクチャ可愛いんだぜ！？

クリツとした青い目、茶色のふわふわの髪に綺麗な顔立ち。
それで舌足らずに「おにいしゃま」と言いながらトテトテ走り寄
ってくる姿と来たらっ…！鼻血もんだぜっ！？

おっと、シスコンだつて？大いに結構！そりゃ可愛い自分になつて
くれる妹がいたらシスコンにもなるさ！

俺？

俺は今自分にあつた武器を探してもらつてゐるんだ。

何せ人修羅の力には大概の武器が耐えれないからなあゝ原作時の武器を今の内に集めとこうつて思つてな、

只今使つてゐる一番のお気に入り”鉄瑰”っていう馬鹿デカイ剣だ。全長は大体1・7m程重さは40kgオーバーの正に化け物ソードだ。

しかも剣に込められた魔法も強い！名前は「アイオブサクリファイス」、自分を中心に大爆発を起こす魔法だ。しかし何故か中心の俺はダメージを受けない、何でだろ？

「おにいしゃまゝどこ？」

！？

イカン！マイエンジェルフリアエが呼んでいる！行かねば！！

「フリアエ！っ！今行くからな！っ！」

走れっ！風の如く！フリアエの元に！！

s i d e o u t

S i d e H u r i a e

ふりあえです！さんしゃいです！

えっと、おにいしゃま大しゅきです！

おにいしゃまはふりあえがよぶとすぐにきてくれましゅ。
とってもはやいの！こう、びゅーんってくるの！

「おにいしゃまどこ？」

「フリアエっ！今行くからなっ！！」

おにいしゃまのこえだあ！

「おにいしゃま」

「今来たぞフリアエっ！どうしたっ？何があったっ？」

「あのね、うんとね、いうっ、あるとくんがね…」

「イウヴァルト…あいつか…」

おにいしゃまはいうづゝ あるとくんといつもけんかしてりゅの、な
んでだろ？

「おいゴラア！イウヴァルトツ！テメエ、フリアエが声出しすぎて
喉痛めたらどうしてくれんじゃボケエエツツ！？」

「ヒイツ！ご、ごめんなさいカイクさん、もうさせませんから！」

いうづゝ あるとくんってね、わたしのいっしやいとしうえさんなん
だよゝ

「チツ！次やったら命はねえと思えよ…
で、何の用だイウヴァルト？」

「あの、けいこをつけてくださ「ハアアアアアツツ！！！！」？
いいいい！！？」

おにいしゃまうるしやいゝ

「俺言つたよね？下らないことでフリアエに負担かけるなって、言
つたよね？ね？」

おにいしゃまというづゝ あるとくんは、
しゅぎよーっていうのばかりしててふりあえとあそんでくれない
の…

「だってカイクさんボクがよんでもきてくれないし！だからフリア

「イチちゃんによんでもらおうとおもって…」

「でもも、だってもあるか！！大体教えを請うなら自分で俺んところこいや！！」

「すっすいません！」

ふりあえつまない」

side out

side Iuvauto

カイクさんはスゴいです。知らないことはたくさんしってるし、けんはサイキョーです。

でもなんだかボクにはちょっとだけつめたいです。

フリーアエちゃんにはあまあまなのに…

まえに、なんでって？きいてみたら「貴様なんぞにフリーアエはやらんぞおおおおおつつつ！」「っていわれました。

カイクさんはスゴいけど、ときどきへんなことをします。

いつかカイクさんにけんでかてるかなあゝ

イウヴァルトよんさいでした。

第一話、マイエンジェルフリアエ誕生！（後書き）

読み難くてすみません。

フリアエの小さい時の可愛さは（多分）異常www

イウヴァルトはカームにコンプレックスを持っていません。
いくら完璧でも中身がアレだとね…

感想お待ちしてます。

第二話、18の誕生日。（前書き）

鳴る神です。

このようなネタを読んいただきありがとうございます。

第二話、どうぞ。

第二話、18の誕生日。

side 門番兵

今日はこの国、カールレオン国の第一王子のカイム様の誕生日なのだが…カイム様は只今、領内の山賊を狩りに出掛けていらっしゃる。

普通は俺達みたいな兵士達が出向く筈なんだが心優しくとても強いカイム様がお一人で狩りに行っている。

何でも新技の練習がしたいとか…
今回ばかりは山賊に同情しちゃうね…

カールレオン国最強の剣士であるカイム様を相手にしようとするなんて…

この国でカイム様と戦いたいと思う奴はいない。
何故ならカイム様は強すぎるからだ。

以前亜人どもが大挙して押し寄せて来たときにたった1人で迎え討ち、千匹以上いた亜人どもを蹴散らしている姿は感動的ですらあった。

普段は優しく、気さくな方で、俺のような一般兵にまで気軽に話しかけてくださる。

妹のフリアエ様には大変優しく、二人はいつも仲睦まじく、よいご兄妹だ。

内政では、幾つもの画期的な政策や物といったものから料理まで、数々のものを生み出し、今この国は過去に例が無いくらい活気づいている。

しかし、武器を持たせれば近隣諸国にまで名を轟かせる腕前で、我々兵士一同が束になっても相手に出来ない程にお強い。

正に完璧なお人だ。

きっとカйм様がいるかぎりカールレオン国は繁栄し続けるだろう。

「開門せよっ！カйм・カールレオン、山賊狩りから帰還した！」

おお、カйм様がお帰りになられた。

開門せねば！

s i d e o u t

こんにちは。

13歳になったばかりのフリーアエ・カールレオンです。

最近お兄様が構ってくれなくて寂しいです。代わりに何故かイウヴァルトがしつこく付きまといてきますが…暑苦しいですし、はつきり言って邪魔です。

え？お兄様とイウヴァルトどっちの方が好きかですか？

勿論お兄様です！

だってお兄様は優しいし、頭もよろしいし、臣下や領民の皆さんにも慕われてますし。

何より近隣諸国では敵無し、とまで言われた剣の強さ…！
カッコいいです…

イウヴァルト？

まあそこそ強いらしいですね…

頭？

良くもなければ悪くもないのではないですか？

そんな事より今日はお兄様のお誕生日なんです！

今回は家族だけでお祝いしましょう、ってお父様がおっしゃたので

凄く楽しみなんです♪

「フリアエ〜！」

あっお兄様です！

「お兄様〜！、早くいらしてください〜い！」

こつ呼べばお兄様は凄いい速さで必ず来てくれますの！

「！、今行くっ！加速装置っ〜！」

ゴアッ！！

何時の間にか目の前にお兄様が風と共に現れました。

「お兄様速いですね！」

「H A H A H A、フリアエの為なら音の壁位超えてみせるさ！」

「そうですか〜、さっ行きましょっお兄様！」

言いながらお兄様の手を引っ張る。

「おいおい、引っ張らなくても行くから大丈夫だよフリアエ〜」

…
…
…

城中庭。

「おおカイクよ、誕生日おめでとう。」

お父様。

「カイク、おめでとうね。」

お母様。

「おめでとございます、カイクさん。」

何故かいるイウヴァルト。

「父上、母上、ついでに何故かいるイウヴァルト。ありがとう、嬉しいよ。」

お兄様、そして私。

とても楽しくて、こんな時間がいつまでも続けばいいな。

と思っていた時。

「グオオオオオオオオオオオツツツツツ！！！！」

恐ろしい声と共に大きな真っ黒のドラゴンが空から襲いかかって来た！

ドラゴンが向かう先にはお父様とお母様が！？

「お父様っ！お母様っ！逃げてーっ！！」

ドラゴンがお父様達に襲いかかる寸前お兄様の声が聞こえた。

「イナズマキーーーークツツツ！！！」

と。

s i d e o u t

s i d e I u v a l u t o

俺は、ドラゴンに襲われる国王様と王妃様を見てこう思った。

「バカだな〜…」

と。

「イナズマキーツクツツツ！！！」

ゴシャアツ！！

カイルさんは声と共にホントに足から雷を出しながらドラゴンの顔を蹴り飛ばした。

「ゴラァ！？蜥蜴の分際で何、俺の誕生日壊しとんじゃボゲエエエツツ！？」

ドラゴンをマウントポジションで殴りながら喋る。

ボグウツ！グシャツ！

それ、殴る音じゃ無いですよ？

「フリーアエが怯えてんだろがあっ！？

このクソ蜥蜴が！！」

いえ、正直ドラゴンより貴方の方が百倍怖いです。

「謝れよおっ！フリーアエに謝れてっ！言っでんだろおがああああ
ツツツ！！」

カイクさん、顔がボコボコで多分喋れないと思います。

「聞いてんのかってツツツ！！」

ガシッ！ブオンブオン！

叫びながらドラゴンの尻尾を掴んで、振り回す。

「言っでんだよオオオオオオツツツ！！？？」

ブオンブオン！ゴシャアアアツツツ！！！

そして城壁に叩きつける。

カイクさん、それ死んでませんか？

思いつつ俺はドラゴンに近づいた。

s
i
d
e

o
u
t

s
i
d
e

K
a
i
m
u

ゴシヤアアアツツ!!!

轟音と共に我に返る。

イカン、バーサーカーモードになつてた。

「父上っ！母上っ！フリアエっ！無事か!？」

見ると父上は固まり、母上は何時もの笑顔のまま。フリーアエは目をキラキラさせている。

「あらあら、凄いですねゝ貴方？」

母上。

「ああ、うん…そうだな。（息子>ドラゴン？）」

父上。

「お兄様すごーい！」

フリーアエ。（相変わらず可愛いよ！）

「無事でしたか…」

父上、それでは今からあの蜥蜴を葬って来ますので。」

「あつああ。（ドラゴンってこの世界最強の生物ではなかったか？こんなに簡単にやられるものか？）」

確認してから城壁に叩きつけられグッタリとしているブラックドラゴンに近付く。

「？」

何時の間にかイウヴァルトがブラックドラゴンの前にいる。

「おい、イウヴァルトそこをどけ。」

今からこの蜥蜴を丸焼きにして後で皆で喰うぞ。」

「あ…カイクさん、俺とコイツ契約しましたから。」

「は？」

いやマジで、は？

「何かコイツから『死にたくないから契約してくれ！』って言われて契約しました。」

イヤイヤイヤ。

「イウヴァルト、お前契約したら何か無くすんだぞ？」

「ああ、何やら『存在感』が無くなったらしいです…」

「ドンマイ…」

それしか言えねえっ！

それ以上キャラが薄くなるなんて…っ！

「まあいい、オイ黒蜥蜴！少しでも暴れればまた顔面殴りとばすからなっ！」

イウヴァルトもダメージ食らうけど…いいだろ、アイツ頑丈だし。

必死に頷くブラックドラゴンを見ながら思っ。

あゝそろそろ開戦か…と。

こうして俺の18の誕生日は終わりを迎えた。

第二話、18の誕生日。（後書き）

ネタですwww

この作品は完璧に作者の暇潰し&自己満足なので細かい突っ込みは無しの方で。

第三話、帝国スーパーフルボツコタイム開始！

side 見張りの兵士

カールレオン国王女フリアエ様が封印の女神になってしまった。

帝国軍が各地の封印を解くべく進行を開始し、それに対抗するために各国が集まり連合軍が発足。

各地で血を血で洗う激戦が勃発した。

しかし、ここカールレオン国では封印の女神であるフリアエ様がいるにも関わらず平和な時を過ごしている。

42

理由その1

ブラックドラゴンの契約者イウヴァルト様がいるから。

イウヴァルト様はブラックドラゴンと契約された方でこの国の王子であるカーム様の幼馴染みだ。

イウヴァルト様はあの最強の種族ドラゴンと契約を交わしたのである、つまり他の契約者とは格が違う契約者である。

イウヴァルト様はカйм様と違い城の防衛を務めていらつしやる。敵をドラゴンのブレスで焼き払い、ブレスが効かない奴は直接剣で斬り倒す。その様子は正に鬼神の如く。

お陰でカールレオン国内部に敵兵の侵入を許したことは一度もない。

しかし、イウヴァルト様は契約の対価に”存在感”を無くし、ドラゴンは見えてもイウヴァルト様を見たことがある者はいない。が、カйм様のみイウヴァルトを普通に認識出来るようだ。

理由その2

契約者など遥かに超越したカールレオン国最強のカйм様がいるから。

カйм様はイウヴァルト様と違い近くの国等を支援しにいく、謂わば遠征隊だ。

カйм様は強い、いや強すぎる。

防具などを纏わず部屋着のような服で敵兵に突っ込み、常人では持ち上げることすら叶わない武器を片手で扱い、欠伸しながら帝国兵を惨殺する。

空に兵器が有れば其処らに落ちている石を投げ撃墜し、少し大きければ魔法で跡形も無く粉碎する。

時々素手で帝国軍に突っ込む時があり、その時は人が投げられ空を

舞い、人が殴られ地にめり込む、という地獄絵図が繰り広げられる。また、本人曰く面倒な時は魔法で万を超える帝国軍が一瞬で灰になる。

イウヴァルト様も凄いがカйм様はその上を行く。味方である筈の連合軍ですら化け物扱いされる始末である。

しかし、カールレオン国の領民や兵士はカйм様を化け物扱いはいしない。

カйм様は国内では王族にも関わらず、臣下や領民、兵士などに気さくに話し掛けて下さり、困ったことが有ればカйм様自らが手伝ってくださる。

また、孤児院という親を亡くした子供達の世話する施設を造るなどとても優しい。

また妹様達にははとても甘く、仲の良い御兄妹だ。

そんなカйм様とイウヴァルト様がいればカールレオン国は帝国軍ごときには絶対滅ぼされることなどあり得ん！

おっと、熱くなってしまった。

職務に戻らねば…

s i d e K a i m u

「あー帝国ウゼー」

戦場のど真ん中で敵を斬り殺しながら物思いにふける。

カイムです、24歳です。

カイムです、最近帝国がウザイです。

カイムです、最近妹分が不足してきました。

カイクです、イライラします。

カイクです、カイクです、カイクです…

…
…
…

てな訳で帰宅

「フリアエエエツツ！！マナアアアツツ！！帰ってきたよおおツツ！！！！」

マナ？あのマナです。

ブラックドラゴンを凹した後俺は暫く武器集めの旅をしていたのだ。その中で石の隠れ里に寄った時に虐待されていたマナを発見。

虐待発見↓美少女になにするかぁーっ！↓キミうちの子にならない？↓…苛めない？（人見知り中）↓可愛えーっ！（抱き締め）↓／／／（顔真つ赤）↓しばし愛の素晴らしさを語る↓もう一度うちの子にならない？と聞く↓うん／／／↓ゲット！！

って訳さ！

いやゝ前世で読んだ「初歩から始める洗脳術」が役にたったなあゝ

ぶっちゃけね、ラスボスが幼女だとやりにくいっいたらありやしない。なんか、こう…罪悪感？沸いてくるんだよなあゝ

てな訳でマナちゃん（6）は養子になったんだけどさ、フリーアに次ぐ人気ぶりだし、なんか俺も溺愛しちゃうし…

とにかく！可愛いんだよっ！！

そう考えるとなんだか帝国が可愛い妹を虐めやがった憎き敵に思えてきた…

そういえば…原作ではマナが天使の教会の司教、いわば帝国の親玉だった訳なんだが…

マナがここにいる訳だし、司教は誰になったんだろ？

「兄上！」「お兄ちゃん！」

おー、My sister、sが来たぞ！

ところで…フリーアエがお兄様って呼ぶのやめちやいましたorz
…しかし！代わりにマナのお兄ちゃんが加わったのだ！
これにより、今までより当社比約二倍の癒し効果が得られます！
それにお兄ちゃんってのもなんだか親しみがあっってお兄様とは違う
感じにくるものがあるよね。

「フリーアエ！マナ！帰ったぞ！
俺がいない間に何もなかったか？」

イウヴァルトがいるからちよつとやさつとじゃこの城は落ちんと思
うが…
やはり、兄として心配だ。

「なにもありませんでしたよ。
ね、マナ？」

「うん！お姉ちゃん！
あのね、イウヴァルトのお兄ちゃんが守ってくれたんだよ！」

あゝっフリーアエとは違う癒しを感じるわゝ
仔犬的な可愛さ？ 愛くるしいわゝ

「そっか、お留守番偉かったな〜っ!」

柔らかい金髪を撫でると翠の眼を細めくすぐったそうにする。

「いよしっ!フリーアエ、マナ。

俺は父上達に謁見してくるからな、また後で会おうな?」

「はい、兄上!」「うん、お兄ちゃん!」

妹達の声聞きながら玉座の間に向かって歩きだす。

そろそろレッドドラゴン…

アンヘルに会いに行かなきゃなあ〜
っと思いつながら。

s i d e o u t

s i d e G a a p u

「ご報告！カйм様、ご帰還なさいました！只今こちらに向かつて
いるようです！」

兵士が膝をつきながら報告した言葉に周りの者達が歓声を挙げる。

「皆の者、静まらんか。」

報告ご苦勞、職務に戻るといい。」

「ハッ！」

去っていく兵士を見ながら考える。

カйм、イウヴァルトの2人のお陰で我がカールレオン国は他国より
数段安全だ。

しかし、カールレオン国が安全でも連合軍全体では帝国軍には負け

続けている。

一部が勝っていてもこのままではいずれ他の封印である砂漠の神殿、海の神殿、そして封印の森が破られてしまうだろう。この戦局を乗り切るにはやはりあれしかないのか…

「カイク・カールレオン、周辺の帝国軍の掃討より只今帰還いたしました！」

おお、我が息子が帰ってきておった。

「うむ、ご苦労。

楽にしてよいぞ、カイク。」

「はい、父上。」

「ところで…カイクよ、一つ…聞きたい事がある。」

この答え次第では策が変わる…

「はい、なんでしょうか父上？」

「正直な所…

お前とイウヴァルト抜きでこの国は帝国軍から護りきれるか？」

イウヴァルトはおるが、やはりそれは個人の力だ。

イウヴァルトが居らねば直ぐに瓦解してしまう。

カイク、イウヴァルト、2人に頼らずこの国を護りきれるか…

その時、1人の将軍が前に進み出た。

「失礼を承知で一言言わせてくだされ！」

「む、なんじゃ言うてみよ。」

「ハッ！我等がカールレオン国軍はカイク様の地獄が天国に思えるような訓練を今までしてきました！」

帝国軍からこの国を護りきるなど造作も有りません！」

大声で訴える将軍。

周りの軍人達も声高に賛同している。

「カイクよ…それはまことか？」

我が息子に聞いてみる。

すると息子は自慢気な表情で言い切った。

「勿論です。」

我がカールレオン国軍は連合内で間違いなく最強の軍隊でありましよう。

兵士1人で帝国兵50に間違いなく匹敵するでしょう。」

「！？、そうか…ならばその兵士を守護に回せばいくら持つ？」

「兵糧にもありますが…一年は固いかと思います。」

一瞬、考える仕草をしたが直ぐに答えをだしたカイル。
それならば…

「……………よしっ！カイルよ！新たな任務を与える！お主1人で各地の帝国軍を撃破し、帝国軍首都を滅ぼすのじゃ！！」

普通なら無茶な命令だ、そんなことは不可能なのだから。

しかし、カイルは、我が息子は、帝国軍がいくら束になるうともかすり傷さえおわんだらう。

そして、圧倒的な力で直ぐにでも帝国を滅ぼすだらう。

「カイルよ、行けるか？」

形だけの確認、答えは既に出ているだろうが、あえて今一度聞いてみる。

返事は勿論。

「……わかりました。」

カイル・カールレオンは！一年以内に帝国軍を滅ぼします！！」

[illegible]

その瞬間、辺りは歓声に包まれ、カイルを讃える声が辺りに響き渡る。

「うむ！今宵は宴じゃ！
皆の者！準備せいつ！！」

その夜カィムを送り出す盛大な宴が開催され、国中がカィムの出立を祝った。

第三話、帝国スーパーフルボツコタイム開始！（後書き）

鳴る神です。

という訳で原作開始致しました。

しかし、オリ主は鬼畜です、外道です。

正面から帝国軍を潰せますが、それはやりません。

こんな小説ですが読んでくださると嬉しいです。

第四話、契約、友の誓い。

Side Kaimu

一年以内に必ず帝国を落とす！じゃないと妹分が足りなくなっちまう…っ！

「深刻だ…」

妹分が無いと飛躍的に俺の力が減る…
それは由々しき事態だ。

ああそつえば城を出るときのマナ可愛かったなあゝ
上目遣い＋涙目＋「いつちゃうの？」
のコンボはヤバかったぜ…

「妹達の為にも先ずはアンヘルを仲間にしなとなゝ」

ぶっちゃけ足が欲しいです。

でも、アンヘルってどの辺にいらんだ？

ん？

なんか前方に見える城…戦ってね？

「仕事じゃ〜ん」

渋々任務である各地の連合軍の救援を果たす為に、砂煙りを起てながら城目掛けて走り出した。

s i d e o u t

s i d e 名も無き兵士

この城は攻めにくく、護りやすい地形を利用した堅固な城だ。
もとは封印の女神様をここで防衛しようという意見もあったぐらい
なねだが…封印の女神様がそれを拒否し、自らの故郷であるカール

レオン国で防衛されることになり、この城は帝国に対する前線基地となった。

そして、今現在この城は帝国軍の攻撃に晒されている。

万を超える軍勢が地を囲み、空からは帝国の飛行兵器が砲撃してくる。しかも、既に帝国軍が城内に侵入しており、最早連合軍は残党が散発的に抵抗しているのみ。

まさに絶体絶命。

私は死を覚悟したが：

ドガアツツ！！

いきなり包囲網の一角が崩れた。いや、正確には吹き飛んだ。

そこに現れたのは身の丈程ある大剣を振り回し、帝国兵を薙ぎ倒し、吹き飛ばし、魔法で塵にする一人の剣士の姿があった。

周りを360°。帝国兵に囲まれているが、それを意に介さずひたすらに帝国兵を蹂躪している。

近づいてくる帝国兵を鎧ごと斬り飛ばし、頭から両断する。

弓兵が遠距離から矢を放つが、矢は身体に刺さりさえせずにいる。

あまつさえ飛んできた矢を受け止め投げ返し、弓兵を射殺す。

その鬼神のような剣士が名乗りを挙げた。

「我はカールレオン国国王ガアプが一子、カイク・カールレオン！
！任により連合軍に助太刀いたすっ！」

戦場全てに響かんばかりの大音声で名乗りを挙げ、ますます敵を葬る男。

カイク・カールレオン！？

あのカールレオン国の化け物だとっ！？

曰く、素手で千の帝国兵を殺した。曰く魔法で戦場を焼け野原にした。曰く飛行兵器を石で撃墜した。

あの逸話にことかないカールレオン国の切り札！

「マハガル！」

カイルム殿が何かを叫ぶと辺りを竜巻のような風が巻き上がり、帝国兵が宙を舞い、地面に叩きつけられ、自らの体重と鎧の重さで骨を折り倒れ伏す。

カイルム殿は粗方帝国軍を葬ったのを確認してから城の中に入っていた。

「はっイカン、皆の者！カイルム殿がおらぬ間持ちこたえるのだ！」

隊長が指示を出し、慌てて従う。

なぜ城に向かったのか疑問に思いながら…

s i d e o u t

side Anhell

我は誇り高きレッドドラゴン。

そんな我が低俗な人間共によって空から落とされ、地に繋ぎ止められている。

最強の種族であるドラゴンが下等な人間共に飼われるなどなんたる屈辱だ！

…？

外から我より莫大な魔力を秘めた者が近づいてくる…同胞か？

否、同胞なら空からは来る筈。

ならば人間？

それこそ否、この魔力は人間に許された魔力ではない、我より莫大な魔力を持つ者が下等な人間にいる筈が無い。

わからぬ…一万年の永きに渡り生きてきた我に解らぬことが有ろうとは…

気が付くと、思考している間に魔力の主が直ぐ近くにまで来ていた。ぬう…なんと巨大な魔力よ…

そしてこの圧迫感…相手は相当に高次元の存在のようだ…

しかし、この世に誇り高きドラゴン族より優秀な種族が他にいるの

か？いたとしても何故今までその存在に気付かなかった？

ドガァッ！

またもや思考していると、人間共の造った建物が壊され、辺りに破片が散らばった。

現れたのは身体に光る線を浮き上がらせた人間だった。

「おードラゴンじゃん、死にかけか？」

近くまで歩いて来る人間のなんと莫大な魔力か！？

「お主…何者だ？」

ジャラリと、身体を繋ぎ止める鎖を鳴らしながら顔を向け、問い詰める。

「俺は人修羅、半人半魔の神殺し、この世界の神を殺す者。」

神を殺すじゃと！？

人間は私の近くまで歩き、語り出す。

「この世界の神は狂ってる。故に俺は神を管理する神、謂わば最高神にここの神を殺すように言われたんだよ。」

神が狂っておるのか！？

それに最高神とは…？

この人間は嘘は言っておらんようだしな…

「それを我に話して何になる？」

問題はこの人間が何故我にこのような話をしたのかということだ…

「まーあれだ、ドラゴン族の使命は優良な種を残す為に出来損ないの種を滅ぼすんだろ？」

確かにそれこそが我等ドラゴン族の本能に刻み込まれた使命だ。

「ならば…狂つてた神など出来損ないの種以外の何ものでもないだろう？」

まさかこ奴！

「つまりだ、お前を俺が助ける。その後、お前の使命である出来損ないの”神”を殺すのを手伝わないか？」

「我に神を殺せと…？」

我は誇り高き最強の種族であるドラゴン族ではあるが、そのドラゴン族を生み出した神を殺せる訳が無い。

「いや、さっきも言ったが神は俺が殺す。完膚無き迄にブツ殺してやる、だが、今俺は忙しい、俺は最強だが体は一つだ。だが俺とお前、二人で組めば一人より楽だ。」

言いながら更に近づき再び喋る。

「俺は樂ができる、お前は生き長らえ、出来損ないの”神”を殺すっていう最高の使命が果たせる。謂わばお互いがお互いを利用し合う協力関係ってやつだ。」

確かに我はこのままではいずれ此処で朽ち果てるだろう。

それも下等な人間共によつて地に縛り付けられながら。

それは耐え難い屈辱だ。

そして、神を殺す。なんと甘美な言葉か！

「まあ、俺としてはお前と友になりたいと思つているがな…話が逸れたな、さあ此処で死ぬか、俺と神を殺すか。二つに一つだ、選べ。」

答えは決まつておるな…

「よかるう、我はその契約を受ける。我等二人で神殺しをなさうではないか。」

ククク…一万年の永き時を生きてきたがここまで楽しいのは初めてだ！

目の前の男はドラゴン族を恐れず、あまつさえ我と友になろうとは！これから殺すであらう神よ！死ぬ前に我とこ奴を引き合わせたことに感謝するぞ！

「よし、ならば俺とお前は共犯者であり同士であり一蓮托生の友だ。これからよろしく頼むぞ。」

笑顔で語りかける人間。

我は一万年の中で恐らく最も深く係わるであらう目の前の男の顔を

記憶に刻み付けた。

「ああ、こちらもよろしく頼むぞ。」

「改めて自己紹介でもしようか。

俺はカイル・カールレオン、だがお前には人修羅と呼んで欲しい。
お前は？」

名か…自ら名を名乗るなどこれが最初で最後であろうな…

「ククク…確かに友に名を名乗らぬのは失礼だな。よかつ、心して聞くがよい。我が自ら名を名乗るなどこれが最初で最後だ。」

「それは光栄だな。」

我がこのようなことをするとはな…

「よいか、我はアンヘル、誇り高きレッドドラゴンのアンヘルだ。」

「アンヘルか…いい名だ。改めて、これから頼むぞアンヘル。」

少し照れくさそうにする人修羅。

「ああ、よろしく人修羅。」

神よ、我等が組んだのだ。逃げられると思うなよ？

第四話、契約、友の誓い。（後書き）

更新が遅くなりすいませんでした！

しかも短いし…

やっぱりもう一つの作品がメインなので、こちらはどうしても遅くなってしまうです。

カイルとアンヘルが手を組みました。

次回から帝国フルボツコタイムが本格的に始まっています。

こんな作者の暇潰し& a m p ; 自己満足の作品ですが、読んで楽しいと思われるなら光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9776i/>

DOD憑依転生異世界巡り。

2011年1月1日15時06分発行